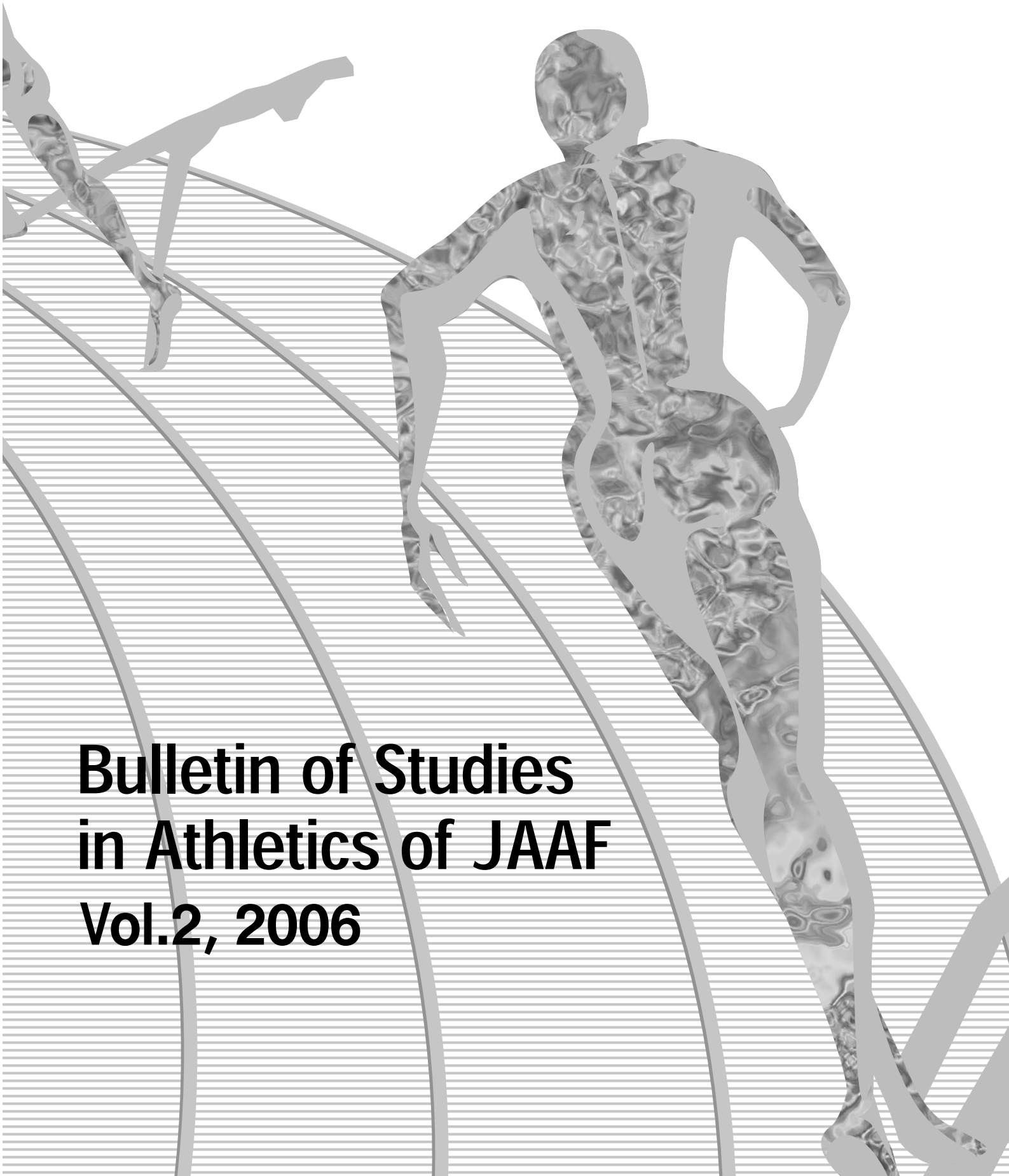
JAAF
財団法人日本陸上競技連盟
ISSN1349-7596

陸上競技研究紀要



Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.2, 2006

「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

１．投稿資格について

本紀要に投稿できるのは、原則として（財）日本陸上競技連盟登記登録者（例：公認コーチなど）とするが、それ以外でも編集委員会が認めた場合には投稿することができる。

２．投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、購読紹介（外国文献の紹介など）、資料、指導法および指導記録の紹介などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

総説および原著には英文のタイトル、著者、所属、要約（150 語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください。）

３．採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

４．原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサーで作成する。本文は、横 42 文字×縦 38 字で 1 頁とする。(1 頁は約 1600 字､刷り上がり 10 頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成)

英文は、A4 サイズタイプ用紙を使用し、15 枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m、kg、sec など）とする。

５．文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）　田中（1996）は　――――

文献は、原則として、本文最後に著者名の ABC 順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）　論文名、誌名、巻（号）、ページの順とする。

例）　田中競子（1996）幼少年の疾走能力の発達、体育学研究　55(2)、155-162。

同一著者、同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a、b、c　をつける。

例）　田中ら（1996 b）は、――――

６．原稿の提出先

投稿原稿（本文、図表など）は、下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに、プリントしたもの 1 部を郵送する。

〒 150-8050

東京都渋谷区神南 1-1-1　岸記念体育会館内

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

（ Tel 03-3481-2300　Fax　03-3481-2449)

E-mail:　kiyou @ rikuren.or.jp

７．原稿の締め切り

原稿の締め切りは、1 月 15 日とし、発刊はその年度の 3 月末日とする。

８．その他

掲載者には、「陸上競技研究紀要」10 部を寄贈する。

問い合わせ先：

〒 244-8529　静岡市大谷 836

静岡大学教育学部　保健体育講座

伊藤　宏（普及委員会調査研究担当）

Tel 及び Fax　054-238-4668

E-mail：ehhitou@ipc.shizuoka.ac.jp

あ　い　さ　つ

（財）日本陸上競技連盟
副会長・専務理事　櫻井孝次

昨年から、陸上競技に関する調査・研究を統合して新たな「陸上競技研究紀要」が発刊され、今年２年目を迎える。日本陸上競技連盟の普及委員会・科学委員会が中心になり、今年も各方面の調査・分析・考察がなされ、レポートとして纏められた。

ご承知のように、日本陸上競技連盟は陸上競技の普及・発展に国際化は欠かせないとして、2006 年４月に世界クロスカントリー選手権大会を福岡で開催し、日本選手の活躍もあり成功裡に終了した。2007 年８月には世界陸上競技選手権大会を大阪で開催すべく準備を進めている。

大会の成功を図るには日本選手の活躍が不可欠となるが、現場コーチの指導とそれを支えるアカデミックな調査・分析・考察が車の両輪となり成果を生み出す原動力となる。2006 年のトラック＆フィールドシーズンも始まったが、日本記録の誕生と共に世界レベルの選手と戦う若手選手の活躍が目立つ。世界陸上を地元大阪で開催することが刺激となっている面もあろうが、理論に裏づけされた現場の指導が成果を示しているものと思われる。

日本オリンピック委員会が文部科学省の協力を得て、ナショナルトレーニングセンターの構想が着々と進められ、陸上競技の練習場が他の競技施設に先駆けて建設される予定となった。今後「国立スポーツ科学センター」との連携をより深めて競技力の向上を図っていかねばならない。

この紀要は海外にも配布される予定になっているが、各国の陸連とも連携をとり、広く陸上競技の調査・研究に役立てば幸いである。

陸上競技研究紀要
Bulletin of Studies in Athletics of JAAF
Vol.2 2006

目　　次

【原著論文】

スタートダッシュから中間疾走までの着地位置の変化
　－特に歩隔に着目して－　・・・・・伊藤　章ほか・・1

世界選手権第８回から第10回大会における
　男子ショートスプリント種目の分析的研究　・・・・・有川秀之ほか・・5

中高年齢女性の100ｍ走競技における疾走速度逓減率　・・・・・田中秀一ほか・・13

大学女子長距離ランナーの等速性脚筋パワー
　及び筋量の特性　・・・・・山内　武ほか・・20

夏季のフルマラソン完走後における選手の腎機能評価
　ー血清シスタチンＣを用いてー　・・・・石井好二郎ほか・・27

男子400ｍハードルにおけるコーナーでのハードリング・イメージに関する研究
　－踏切脚が右脚の競技者と
　　左脚の競技者との差異の抽出－　・・・・・苅部俊二ほか・・31

力学的エネルギー利用の有効性からみたアテネオリンピック
　男子20km競歩におけるメダリストと日本人選手の比較　・・・・・法元康二ほか・・38

関節角度の位相差を用いた競歩の運動パターン抽出　・・・・・平川武仁ほか・・47

女子４×400mリレーにおける各走者区間タイムからみた
　オーダーについての一考察　・・・・・渡部　誠ほか・・53

女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクス的分析　・・・・・吉原　礼ほか・・58

砲丸投げにおける砲丸速度に対する身体各部位の貢献
　－世界レベル選手と日本レベル選手との比較－　・・・・・田内健二ほか・・65

【資　　料】

第21回全国小学生陸上競技交流大会優秀選手の身体的･心理的・疾走能力測定の結果
　・・・・・伊藤　宏ほか・・74

【科学委員会研究報告　陸上競技の医科学サポート研究】　・・・・・・・・・・・・・・85